

オ、ホ、ホ、マ我折れ。そりやアノなんぢやぞえ、
オ、本のこれが禄盗人ぢや、知行盗人ぢや、盗人ぢ
やくくく、なんとそうではあるまいか」

と、まくし掛けたる雑言を、

尾上は堪へくても、無念の涙保ち兼ね、齒を喰ひ縛り
堪へる。

岩藤「オ、なんぢや泣かしやるか、オ、ちと堪へやう。
町人の娘でも今では武家の御奉公人、オ、悔しかろ、
道理ぢやく、ヤ本にそうぢやはいな。最前も仰る
には、『心付かぬ事あらば、御指南頼む』と言はしや
んしたの。ム、ドレ、教えてやろ」

と立ち上がり、持つたる扇振り上ぐれば、

身をかはして打ち落とす、

『手向ひなさば一打ち』と、懐刀抜き放せば、

『これは』と驚く女中達、

尾上も今は堪り兼ね、共に抜かんと立ち寄りしが、

尾上『思ひ廻せば廻す程、大恩受けた御主人の御先途も
見届けず、我が身に過ちあるならば、後に残りし親達

の御嘆きはいかばかり』

と、堪へる辛さ苦しさは、胸も張り裂く血の涙、身も浮
くばかり嘆きしは、傍で見える目も哀れなり。

- ・ 岩藤「ムウ、相手にならぬは、この岩藤が恐ろしいの
か、オ、恐ろしい筈、道理ぢやく。そんならもうこ
りや納めましよ、ノウ、納めましよくどりや、納め
ましよはいの。どれく帰りましよく。本にくこ
なさんに掛かつて、オ、これ見やしやんせ、足袋も草
履も砂まぶれになつたはいな。イヤナニ尾上殿え、な
んとこの草履の汚れたのを、拭いて下さんせぬか」

尾上「アノ、私に」

岩藤「おいの」

尾上「ヒエ、」

岩藤「嫌か、嫌か」

尾上「ぢやと申して、それがまあ」

岩藤「それがまあ、サ、サ、拭いて下され、拭いて下
され。ソオレ、ソオレ。刃物汚しせうよりは幸ひなこ
の草履」

と、足に掛けたる土草履を、尾上が頭丁々々、

腰元「これは」

とばかり奥女中、気の毒余り立ち騒ぐを、

尾上は声掛け、

尾上「ア、これく騒ぐまい、女中達。岩藤様がこの尾
上を御異見のための御打擲。これ、わしや有難うて
く、かゝさんの御折檻と思ふてこの身の節々まで、
有難うて忝い。ム、ホ、ホ、ホ、ホ、オ

ホ、ホ、。いや申し岩藤様、生みの親も及ばぬ御異
見、エ、有難う存じます。この上は随分と武芸をも
心掛けて御奉公を致しませう。また、このお草履は私
がためには御教訓のこの一品。申し請けて私が守り」
と、懐中したる心根は、言はぬ色を言ひ草履、胸に
納めし利発さよ。

さすがの岩藤呆れ顔、

岩藤「なんぢや、その草履をわしに貰ふて守りに掛け
る、アノ守りにや。テモ恐しい辛抱な人、異見した甲
斐がある、以後をきつと嗜ましやれ。サアく行きま

せうく、お暇申さう」

と替草履、心は後に尾上をば、睨み廻して立ち帰る。

- ・ 尾上は後を打ち見遣り、堪へくし溜め涙、一度に『わ
つ』と伏し転び、身も浮くばかり嘆きしが。

・ 数多の女中が立ち寄つて、

腰元「これく申し尾上様、あの憎体なお局の、気質
は常からようご存じ。お腹立ちはお道理なれど」

腰元「いつもの事ぢやと思し召し、必ずお気に障えられ
ずと、まづく屋敷へお帰り」

と、諫め立つれば、

泣くくも、抱へ引き締め立ち上がり、女心の一筋に、
また思ひ出だす口惜し涙。

早や寺々に暮れの鐘

明日は我が身も消えて行く、夕告げ鳥の啼くくも、打
ち連れ館へ

廊下の段

（二重）急ぎ行く。

・星月夜、鎌倉山に風誘ふ、扇ヶ谷に棟高き前の管領足利家の思ひ人、花の方の御館、咲き続きたる花の御所、盛り十寸見の奥御殿、色香争ふ長局、武家とはいへどなまめかし。

・世の憂きを空吹く風と有頂天、屈託なしの腰元共、一つ所に寄り集まり、

お冬「オ、お仲女郎、軒から軒の隣部屋も事多い時は遠々しく、今更言ふには及ばねども、人目には楽に見える奉公向きのせつろしさ。部屋方者と賤しまれ、よい奉公もする事ならぬ、皆面々の肩尽くちや。この春の出代はりには、『出てのけふ』と思ふたれど、ア、いづこも同じ鶏の音色と、重年をしたのちや。もうどの白壁も同じ事、縁次第ぢや」とさがな事、口も端の姦しさ。

腰打つて、負けぬお冬がつぼく口、

お冬「イヤモ、気には掛きやんな。お仲が御主人お局の岩藤様、この広い御殿の内、誰が一人お睦まじう、相口といふが根からないぞや。これお初殿、昨日鶴ヶ岡での事聞いてか」

お初「イエく、私はなんにも存じませぬ」

お冬「そんならマア聞きや。お局様と尾上様と御同道で御代参にお出でなされたところ、例のわんざんが出たかして、マあらう事かはしたくない。御用先で悪口たらだら。まだその上に大それた、お中老もお勤めなさるゝそなたの御主人尾上様のお髪を、主の草履で叩いたといのう。堪忍強い尾上様、御代参なりお上の名代、ぢつと堪へてその場は済んで仕舞ふたげな。がなんと思やる。掛け構ひのないこちと迄、モ腹が立つてく、夕べは癩が差し込んで、お夜食も食べなんだ」と、苦は色変える松風の、

腰元「評判者ぢや」

と口々に、誹る折から

・主の噂も鳥影も、日脚も延びる八つ下り、お下りのお迎へと、お初がそれと気も浮かぬ、小腰屈めて、

お初「オ、これはく。皆打ち寄つてお陸まじい、面白そうなお話。新参の私故、その仲間へは這入れまい。後程お目に」

と言ひ捨て、御殿を差して行く所を、

お初「ア、これくお初殿、そなたもこちが仲間内、まあくこゝへ」

と呼び掛けられ、

嫌とも言はず惣々の、中へ座れば差し出のお仲、

お初「ホンニこなたは仕合せ者ぢや。結構な旦那を取れば勤めながらも骨は惜しまぬ。そなたの旦那尾上様の心よし。モ何から何まで御発明な御生れ。道理こそ育ちが育ちぢや。お宿といふは、このお屋敷のお金御用一式、親御様が勤みやるげなの。人は氏より育ちぢや」

と、影口話の

・奥の間より。立ち出づるは顔も心も直ぐならぬ、曲りくねつた局岩藤、辺り見廻し見廻して、

岩藤「ヤイく女子共、喧しい、そりや何を言ふ。次へ行け。行かぬか、立たぬか」

と、呵られながら

女子共、我が部屋々々へ立つて行く。

・岩藤「ア、こりやく初、我れにはちつと用がある。

こゝへ来い、こゝへ来い」

お初「ハア」

岩藤「怖い事はないはいのう。来いと言はる、マアくおぢやいのう。アノそなたは女子共を集め、一端立つてなんで人の噂を言ふぞ。サ、なぜ自らが事を悪う言やつた。なんぞ遺恨でもあつてか、たゞしまた尾上殿が悪う言へと言ひ付けたか。サ、サ、マちつとこゝへおぢやいのう。どうぢや、ヤ、サどうぢやいのう」と、猫撫で声も気味悪く。

お初は漸う傍へ寄り、

お初「イヤ、私はたつた今参しまして、なんにも申す

を喰はせて置けば、この一家中はお前とわしが」
彈正「ア、コレ。シイ。岩が物言ふ世の譬へ、互ひの胸
は。ナア。イヤナニ岩藤殿、吉左右を相待ち申す」
と、浮べる雲の空頼み、
奥と部屋とへ時宣式札、別れて（別れ）

長局の段

ラクリ「こそは（てこそ）入りにける。」

・後見送りて襖の蔭、お初がそれと、抜き足差し足、辺り
を眺め、吐息吐き、

お初「アモ、恐ろしい巧み事。お下がりの遅い故、どう
かかうかと思ひ過ごし、陪者の行く事ならぬ奥御殿、
往てみようとは思ふたれど、咎められよか叱られうか
と、取つて返した襖の蔭。悪局の岩藤殿とあの伯父
御の弾正殿、大それた悪事の相談、こりや大切な事ぢ
やはいの。尾上様に申し上げ、お上への御忠節。イヤ
くく、証拠も持たず大切な事を生半かに、これを訴

へてお主様を科に落とし、どの様な御難儀を掛ける
巧みの程も知れぬ。わしが大事のお主といふは、尾上
様より外にはない。そうぢや、そうぢや」
と一筋に、恩義に迫る主思ひ、

待つ間もどけし長廊下、しづく御殿を下がる尾上。
それと見るより、

お初「オ、御機嫌よう今お下がり、いつくよりも遅い
お下がり。どうやらお顔持ちも優れず、お心悪うはこ
ざりませぬか」

尾上「アノ初とした事が、気疎い物言ひ。毎日々々の御
前勤め、下がりの早い事もあり、御用が多けりや遅い
事もあるはこの上まゝある事。勝手知らぬそなた故、
案じるは無理ならず。サア、供しや」
と何気なき、

詞にそれと気も付かず、上辺を包む上草履、
直す草履も昨日の遺恨、思ひ悩みて一筋に、歩む廊下も
心には、羊の歩み隙の駒、
・神ならぬ身のそれども、知らぬお初が物案じ、

ラクリ「幾間も遠き長局、部屋の戸開けて内入りも。」

常に変わりし顔色を、『悟られまじ』と癩に紛らし、

尾上「正直は先から持病の瘡えが起こつたはいの。
夕飯も食べたうない。いつもの通り擦つてたも」

お初「ハイ」

とお初が差し寄つて、

お初「まづお枕を遊ばしませ、お風邪召すな」
と掻巻を、甲斐々々しくも立ち廻り。

お初「お癩の起こるもお道理様ぢや。それに付けても軽
い者は奉公とても気散じに、旦那様やら御家来やら、
お友達見る様にお心安うなさつて下さりや、病ひ気も
ござりませぬ」

尾上「オ、言やる通り。上々方の宮仕へはいかう心気
を使ふもの。そなたので、御も武士と聞いたが、世が
世ならどの様な御奉公も仕やる筈を、町人の娘のわし
が使ふといふは、さぞやさぞ心憂くも思やらうが、と
かくに人は時節を待ち、花咲く春を待つのが肝心」
お初「オ、勿体ない事御意遊ばすな。何事も旦那那のお

話に御存じならん。私親子が受けし御恩は、口にも筆
にも尽くされませぬ。せめてもの御恩報じ、無調法な
私が、お傍でどうぞ御奉公とお願ひ申し、この春から
初奉公の御面倒、有難う存じます。その大切なお前様
が御病身なをお案じ申し、どうぞお煩ひの出ぬ様に
と存じまするが、年端も行かぬ私が口からませた事を
言ふ小癩者とお叱りも、ホ、あらうけれど、『とかく
に人は気を晴らし物に屈託さへ致さねば、煩ひは出ぬ
ものぢや』と、巧者なお医者のお申されました。が、そ
の御養生には物見遊山。アノお前様も芝居はお好きで
ござりませぬな」

尾上「オ、なるほど芝居は好きぢや。がそなたも定めて
好きぢやあらうの」

お初「イヤもうくく、好きの段ではござりませぬ。
そう申す内歌舞伎より、操り芝居の浄瑠璃が、私は面
白うござります」

尾上「オ、それなれば話が合ふ。わしもきつい浄瑠璃が
好き。しかし、たまくの宿下がりより外は、浄瑠璃

本で楽しむばかり」

お初「ハイ、私もお屋敷へ上がりませぬその前は、よう見物に参りました。が当り浄瑠璃も多い中に、アノ忠臣蔵の浄瑠璃程面白いのはござりませぬぞえ」

屋上「オ、あの師直面の憎さ、憎さ」

お初「イヤ申し、お前様のお心には、塩谷殿の師直へ切り掛けられしところは、尤もな事に思し召すか。たゞしました、不了見な事に思し召すか。サ、なんと思し召しますえ」

屋上「さればの、御短慮にはあつたれど、遺恨に遺恨を重ねる上は、御尤にもあるかいの」

お初「イエ、イエ、く、憚りながらそりやお前様の御鼻肩口。塩谷殿は大不了簡、サなせと御意遊ばせ。大切な身を軽々しう短氣にその身を亡し給ひ、親御様のお嘆き。本に、私とした事が粗相な、塩谷殿に親御はないもせぬもの、ホ、ホ、ホ、オホ、ホ、ホ。サなんと思し召す。家国を亡ぼし奥様はじめ御家中散り散り。たつた一人の不了簡が千万人の身に掛かつて、御恩を

受けた者共の嘆きの程はいかばかりと思し召すぞい

の、お情けない。ハア、阿呆らしい、なんのこつちや、拍子に乗つてお前様へ御異見の様に。オ

ホ、ホ、オ、おかし。どりやお薬を見て来う」

と、何か詞に綾の糸、勝手へこそは立つて行く。

・後に尾上は胸迫り、忍び涙の涸も瀬も、明日は亡き名を白紙に、硯の海のそこはかと、泣き長文も後や先、書き置く筆の命毛も、露と消えゆく果敢なさを、絶え入るばかり忍び泣き。

涙と共に書き留め、革の文箱も浦島が、明けて悔しき遺恨の草履。文諸共に文箱の、紐引き締めて片へなる、手箱の内を形見分け、数も涙の玉櫛笥、細々しくも小文庫に、(江戸冷暴) 思ひ詰めたる憂き涙、包むに余る小風呂敷、中結び締めて玉の緒も、今を限りの空結ひに、封もしどろに書きくれて、胸に満ちくる血の涙、袖に包みし思ひなり。

・何心なく勝手口、お初は心息せきと煎じ上げたる薬鍋、片手に茶碗携へ出で。

お初「サアお葉」

と差し出だし、見れば包みと文箱に、きつと目を付け、

お初「これはしたり。お心悪いにどこへのお文、お気が尽きように何事」

と、問ひ掛けられて

さあらぬ体、

屋上「イヤ、この文はかゝ様へ急に上げねばならぬ文。

この包み大儀ながら、つい往て来てたも」

と物軽に、

言ひ付けられて、もぢく、と、どうやら済まぬ今日のしだら、不精々々に、

お初「アノ、参れなら参りませうが、アレ、御覧じませ。空合ひも曇つて来る。勝手がましう思し召しませうが、明日の事になされませぬか」

屋上「テモ初とした事が、いかに心安立てとて主の言ひ付ける宿への使ひ、明日の事にもせいとは、いかに女子の主なればとて、主の言ひ付けを背きやるか」

お初「イエ、イエ、く、なんの御意を背きませうぞ。御持病のお癩も起こり、お顔持ちも悪い故」

屋上「イヤ、癩気はもう治つた。日の長けぬ内、早

う行きや」

お初「ハアイ」

屋上「サ、早う行きや」

お初「ハアイ」

屋上「何をうぢくするぞいの、行けと言は、行かぬか」

お初「ハイ、只今、参りますはいの」

と、文箱取り上げ次の間の、案じに胸も張葛籠、明けて出したる生木綿の、在所染めなる紋付の、部屋方者の一張羅、帯仕直して一人言、

お初「今日に限つてこのお使ひ、行きともうて、行きともうて、尾上様のお身の上が案じられてどうもならぬ。昨日鶴ヶ岡の喧嘩の様子、御殿一杯の取沙汰を御存知ないか。わしにまでお隠しなさるゝお心の程が、わしはどうも案じらるゝ。真実底から大切に思ふ

お主の大事を、こりやアノ虫が知らすとやらいふのか、ア、心許ないく、御機嫌に違ふても往た振りして行くまいか。イヤくくくどういふ急な御用やら知れぬ事を、そうもなるまい。オ、かういふ時の仏神様、そうぢや、そうぢや」

と塵手水、一心無我の手を合はせ、

お初「南無観音様々々々、南無鬼子母神様々々々々々、お宿へ参つて帰ります内、主人の身の上頼み上げます。どりや、一走り走つて来う」

と、小棲凜々しく高絡げ、錠口差して、出でて行く。

・影見ゆるまで見送りにて、堪へくし胸の内、思はず『ツ』と伏し沈み、消え入るばかり嘆きしが。

漸うに顔を上げ、

尾上「まだ昨日今日、馴染みもないこのわしを大切に、大恩受けた主人ぢやと、年端もゆかぬ心から、大事に思ふてくれる志、こりや、忝いぞよ、嬉しいぞよ。

岩藤へ遺恨を察し、先にも余所事に浄瑠璃の例えを引き、わしが短気な気も出よかと、言ひ廻したる健気

かゝ様のその場ですぐに死なしやんせう。今死ぬるこの身より後の嘆きを見る様で、胸も張り裂く悲しさはなんの因果の報ひにて、親子の縁の薄墨に書き置く筆の逆様事、必ずお赦し遊ばせ」

と、正体涙せぐり上げ、身も浮くばかり取り乱す。

尾上「ア、我れながら未練なり。女ながらも武家奉公、草履を以て面を打たれ、何面目に存へて、人に顔が合はされう。とは思へども大切な御前様への忠義を思ひ、今までは存へしが、この晝置に委細の訳、伯父弾正が悪事の密書、命を捨てゝ上への忠節。たゞ何事も宿世の約束、最期の晴れの仕度して一遍の経陀羅尼、唱へんもの」

と一間なる、仏間へ差して日も西へ。

・夕日映き、空色も磨き立てたる練堀造り、足利家の裏門口文箱抱へ出るお初、形振り見ずに息せきと、行く

向ふより二人連れ、何かぶつくさ話し合ひ、来るも

お初が心の辻占、往き違ひ様、

町人「叶はぬくもう叶はぬ、取つて返すがまだしもの

な利発。今別れたが一生の別れとは知らずして、さぞやとつかは戻つて来て、嘆かん事の不憫や」

と、身も浮くばかり咳き上げて、前後不覚に嘆きしが。やゝあつて顔を上げ、

尾上「とゝ様やかゝ様のこの年月のご不憫がり、御恩は海も猶浅く、山より高き御恵み、片時忘れぬお二人様。この中のお文にもかゝ様の細々と、エ、『いか

うこの頃はおしなへて引き風邪の流行病ひ、一入案じらるゝ程に、この守りは萩寺の厄病除けの御守り。傍輩衆も多い事、悪い病ひの折見舞ひ、移らぬ程に大事に掛きや。またその上に身用心といふて外にはない。食べ物に気を付けて、気鬱せぬ様に折節は、酒でもたべて気を晴らし、煩はぬ様第一は、御奉公を大切に、また合ひ葉の黒丸子、切れた時分と気を付けて、もう三年で御年も明く、お礼奉公早うして下がりやるを指折つて待つてゐる』と、小さい子供かなんぞの様に、成人のこのわしを大事がつてござるその中へ、あの文を御覧じたらなんと身も世もあられうぞ。常に気細な

事」

町人「ア、可愛い事をしました」

と、聞く辻占に

お初が『ハツ』と、見遣る空には一群の、泊鳥の啼き連れて、最期を告ぐる魂呼ばひ、心細さも身に沁みて、歩みもやらす立ち止まり。

お初「ア、気に掛かるく。辻占の今の話、烏啼きのこの悪さ。アレ、アレく怪しからぬ胸騒ぎは、こりやお宿へは行かれぬはいの。様子は知れるこの文箱、封じを切つて見てのけう」

と、思ひ切つて封押し切り、見れば包みし草履片々、文取り上げて押し開き、

お初「なんぢや、『晝置の事』、こりや叶はぬ」

と懐へ、一字も読まず一散に、御門の内へと

(三) 入相の

・鐘も無常を告げて行く、転んづ起きつ廊下口、半狂乱のお初が仰天、部屋の襖も案内なく一間を見ればこは如何に、血に染まつたる尾上が亡骸、抱き上げて

